
気弱な義兄と猛る義妹

真・バグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気弱な義兄と猛る義妹

【Nコード】

N8920H

【作者名】

真・バグ

【あらすじ】

兄、東雲光^{しのめひかる}20歳。気弱で（ていうか自虐的）お酒を飲むと泣き上戸な何でも出来る美形。義妹、東雲加奈^{しのめかな}17歳。気が強く、勝ち気な何も出来ない義妹の話です。

PVアクセスが2万超えました！皆さんアリガトー！！

プロローグ……です（前書き）

5～6話位でネタバレそう。

ブローグ……です

えと……こんにちは。えっ？おはよう？こんばんわですって？すみません…気が利かなくて…。

えと……ボク、東雲光^{しののめひかる}って言います。あっはい、ボクの事なんてどうでもいいですね。すみません……

加奈さん……初めまして

加奈さんがボクをにらんでいます。怖いです……

は！！まさかボクが義兄だから！！そうですよね…ボク如きが義兄だなんてイヤですよね……

今ボク達がいるのはとある料亭にいます。ボクの家は別に裕福というわけではなく、結婚相談所が払ってくれています。つまりはお見合いか……

「光、そちらにいるのがお前の新しいお母さんの美加^{みか}さんだ。挨拶しなさい」再婚な訳です

「はっハイ！ボツボク、し、東雲光と言います！！」ううゝ、緊張して舌嚙んだ　しかもハイがハイになつてたし……

「ふふ、そんな緊張しなくてもいいのよ。それよりも」急に美加さ、いえお母さんが隣にいる女の子の後頭部を掴んで（掴んで？）頭を下げさせた

「娘の加奈共々、よろしくお願いいたします」

優しそうな微笑んでいます。

「こちらこそよろしくお願いいたします。」丁寧に挨拶されているんだからボクも出来る限り丁寧にかえさないと……

「光くんは礼儀正しいわねゝ。加奈と大違いだわ」そういつてお母さんは加奈さんの頭をペチペチ叩いた。何だか申し訳ない気持ちです……

「あ、あのよろしくお願いします。加奈さん」

ボツ！

ボツ？何でしょうボツって

「あ、あの加奈さん？」まさか嫌われた！？ボクって挨拶するだけで嫌われるような人間だったんですね……。わかってたけどいざそれに直面すると辛いです……

「よろしく……」弱々しくよろしくつと云ってくれた。でもそれ

は羞恥と仕方なさが混じったよろしくだった

やっぱりボク駄目ですね……

「あーこら、あんまりネガティブになるな」お父さんが励ましてくれました。それもまたかっという感じで。やっぱり駄目なんですねボク

お留守番……………です

新しいお母さんと義妹の加奈さんと対面してから一週間たちました。お父さんとお母さんは今新婚旅行でフランスに行っています。

仲が良さそうで嬉しいです。そしてボクと加奈さんは……

「加奈さ〜んお昼ですよ」一応ボクの方が年上なのでボクの方から打ち解けようとはしてますけど……………

「後で食べるから置いて〜」とおっしゃってます。一緒に住んでから一週間。一度たりとも一緒に食べてくれません。何でしょう？ハッ！まさかボクの作る料理は不味くて食べられたものじゃないから？加奈さんは優しいからボクが居ないときに捨てたりしているのでは。そしてお腹がすいたら外で食べたりしているのでは。最近頻繁に外出したりしているなはそのためでは……………。ボクは最低です。人が食べられない物を家族とはいえ薦めるなんて早く謝らなくちゃ

〜加奈 サイド〜

なんかアニキが頭下げてる。しかも少し震えて

「ごめんなさい！！」へ？なにが！？あたしなんかされたっけ？

そう考えるのを何を勘違いしたのか

「立って謝るなんて図々しいよね……………」そういつて土下座し始めた。だから何が！？

「あの〜、何で謝るの。何か訳が分からないんだけど」うん分らない

「加奈さんは優しいな。ワザと惚けてくれるなんて」はい？惚ける？あたしが？何で？あたしがこの家に来てから一週間。アニキの全てを知ってるわけじゃないが今日のアニキは変だ。いつもの（いつ

もと言っても一週間だけ）アニキは自虐的だけど優しく、常識的な人だ。少なくとも変な事、それも急に土下座したりはしない。何か居心地悪いが土下座してるアニキをもっと見たいという願望もある。しかしカッコいいな。普通の奴が急に土下座し始めたらキモイがアニキみたいなイケメンだったら話は別だ。本人は自覚してないけど、しかも容姿を褒めると落ち込むし……。そこは面倒くさいけど「イヤだから、惚けてないから。あたしは、何で、いきなり、謝るのかと聞いてんの」とりあえず

「あたし」から強調した

「えう……」

えうって！いまえうって！！何か可愛いじゃん。男だけど

でも女のあたしより可愛いのが気に食わなくて…

「だから！！何で謝るのかって聞いてんの！！！！」

ヤツテシマッタ……

アニキ怯えてるよ

「えつえと、か、加奈さんがボクの作ったご飯たべて……………」（キョドって長いので中略）だから……………」あゝつまりアニキは、あたしがメシの時一緒に食わないのに、自分が外出してる時に食うので自分の作るメシが不味いと勘違いしたのか……

あたしはアニキと顔合わせて食うのが恥ずいだけなんだけどなゝあたし男っぽいし。母さんや友達も《あんた男っぽいね》とか言われてるし。

あたしも女何だけどなあ……

「大丈夫だって。不味いなんて思ってないし、むしろうまいと思っ
てっから」事実、確かにアニキの作るメシはうまい。店を構えたら
絶対繁盛する。

「ホント？」

くっ！！萌えるな

「ホントホント。だからそんな思い詰めなくても大丈夫だって」

「うっうん…ありがとっ…」ニコ

ついそんな効果音を付けたくなるほどきれいだった

「じゃあボクはコレで戻るから。邪魔してゴメンね」ボタンとドアを閉めた途端

ブポアア！！

あたしは鼻血を致死量ギリギリまで噴いた。

一分を近くもった事を褒めてくれ

なんか来るらしい（前書き）

加奈視点です。

なんか来るらしい

ピピピピピピ……

ええい、うるさい！これ以上うるさくしたら叩いてやる……

「加奈さん、起きてください。朝ですよ」

あーもううるさいー！

ゴンー！

うん。いい音。まんぞくまんぞく……

「加奈さん、ボクの事嫌いなんですか？」

えっ？加奈さん？あたしを加奈さんと呼ぶのは……！？

「えうあーアニキ……」

しまった……よりによってアニキが起こしにくるなんて……

ついかにアニキが物凄い勢いで落ち込んでるな

「あーゴメンゴメン。別に嫌いじゃないから」

「ホント？」

この人、朝からあたし萌え死にさせる気が……

「そ、だからご飯食べよ」あたしがこの家に来てから1ヶ月。流石にアニキの扱いに慣れた。そのせいであたしは1日に2～3回死にかける（全て萌え死に）

「そんじゃ行つて来まーす」

「うん、行つてらっしゃい」

「気をつけて行くのよ」。不注意で事故つたって事にならないでねー

「一言余計だよー！」ちなみに母さん達は新婚旅行から帰って来ている。何か色々あったらしく、いつもより陽気になっている（作者は面倒がって書かないけど）

「ねえ加奈、今日加奈ん家行つていい？」

いきなり話しかけてきたのは小学校からの親友の後藤 博美。はつひろみ

「いいけど何で？別に面白いもの無いけど」

「いやーヤッパ友達の新しい家みたいし」

「まあいいけど、」

「つーかどこにあんの？隣町？」

「いや地元だった。ほらあの坂の上のコンビニの近く」そう、最初
はあたしも隣町辺りと思ったが、実は地元だった。いちよー母さんは
「近くだから転校しなくてもOKよ」とは言ってたけどまさか歩いて
十分位の場所とは思わなかった。

「そっか、じゃあ一旦家帰ったら行くからよろしく」

なんか博美が来ることになった

本屋さん……………です（前書き）

新キャラ登場します

本屋さん……………です

今日の講義が少なくて早く帰れそうです。本当はサークルが会ったけど、何故かボクだけ来なくていいって言われました。もしかしたらボクって邪魔だったのかも…

そうです。そうに違いありません…

やっぱりボク何やっても駄目何です…

人間、向き不向きがあるらしいですけど、ボクの場合、そのほとんどが駄目だなんて…

少し悲しくなってきました。とウダウダ考えていたら行きつけの本屋さんに来てました。

「ついでだし、面白い本でも探してみよう」

「今日は結構人来てますね…」いつもの1・7倍位います。

「あ！この本、今日発売日だったんだ。」そういつて手に取ったとき、

「あれ？東雲先輩ですか？」

「ひゃあ！」

突然横から声をかけられたので驚きました…

「いや、そこまで驚かなくても…」

「あ、西田さん。お久しぶりです。」

えと、彼女はボクと同じサークルの後輩の西田桂年^{にしだ けい}は一つ下の19歳で少しクールな人です。最近本屋さんでバイトしていると言う話を聞きましたが、まさかボクの行きつけの本屋さんとは思いません

でした。

「先輩はこの本屋によく来るんですか？」

「ハイ。ここ、大学に行く道にあるのでよく寄り道してます。」

ここの本屋さんは品が多く、映画やドラマ化した本はともかく、マイナーな作品を数多く置いていたので、ついつい見入ってしまったりしています。

マイナーを馬鹿にはいきませんよ。この世全ての作品はマイナーから始まってるんですから。「へえ、じゃあ先輩って常連なんだ。でもなんかイメージ通りですね…気弱な感じで」最後のほうは小さくなってきましたけど聞こえてましたよ…でもやっぱりボクってそういうイメージ何ですね…

「じゃあこの事情とか詳しいですか？」

「えっえと、詳しいかは分かりませんが、少しくらいなら……」
たまにここでアルバイトをするときがあつて、少しくらいなら知ってますけど…

「じゃあお願いして良いですか？勿論、無理にとは言いませんけど」
ボクにお願いですか？えと、ボク如きで良ければいくらでも手伝いますけど、

「えと、ボク如きで良ければいくらでも……」

「ホントですか！じゃあここでバイトしてくれませんか？最近辞めちゃった子多くて困ってるんですよ」

「えとその辞めちゃった子にもしかして倉田君っていましたか？」

「えっ？いましたけど、知ってるんですか？」

「ハイ。あの子、彼女とのデート資金の為にアルバイトしてるんですよ。彼女思いのいい子ですよ」倉田君か……そういえばここ3ヶ月位会ってませんね。また会って見たいです。

「話がそれちゃいましたね…ここでアルバイトすれば良いんですね。」

分かりました。」

「ありがとうございます！！じゃあ店長に話して来ますからそれじゃ！」

「ハイ。アルバイト、頑張つて下さいね。」

く桂 サイドく

「えっ！東雲君がシフト入ってくれるって！？冗談じゃ無いよね！？」

なんか店長が少し興奮しているけど何で？

「何でそんなに驚くんですか？もしかして駄目でした？」

「イヤイヤイヤイヤ！有難う〜！この店絶対保つは！！」

「先輩つてそんなにすごいんですか？」

そうは見えないなあ…

「凄いななんてもんじゃ無いよ。ここら辺りではかなり有名よ！！」

有名？あの先輩が？

「あの子一人雇う為にバイト代二倍にする店も在るんだから！！他には時給3000円にする所も在るわよ！！」

「えー！！何その好待遇！というか時給3000円って何！？」

あの気弱な人がそんなに凄いのか！というか私の約三倍！？（時給950円也）

「何がそんなに凄いんですか？というか店長、興奮しすぎ！」

「えっええ…流石に少し興奮しすぎたわ…」

「で、結局何が凄いんですか？」

「一言で言つなればそうね……………魅惑……………かしら…」

そっいつて仕事に戻って行った…
魅惑？

ヤバイ…なんかいろいろヤバイ…（前書き）

久しぶりの更新です

ついでに加奈視点です

あと感想などよろしく

ヤバイ…なんかいろいろヤバイ…

「ただいま」

「おかえりなさい、加奈さん」

「おう、お邪魔してるよ」

なんかいた…梅雨時のキノコみたいになんかいた
ジャー

「……………」ジャバジャバパッパッ（手を洗う音）

「…お邪魔してます…」

今度は堕天使出たー！！つかだれだ？
するとアニキが来て

「加奈さん、二人はボクの友達くしなだのみなと櫛灘あきは湊と秋葉こう紅です

因みに最初に挨拶したのが湊で、トイレから出てきたのが紅ですよ」

ヤバイ…なんかいろいろヤバイ…。なんか既に頭の容量が危ない（
気がする）

「あ、ああ、どうも…」

とりあえず挨拶。これで乗り切る！挨拶と握手は世界共通だ

「……………光、どこか出掛けないか？」

お前の妹は俺達が少し邪魔らしい」

いや別に邪魔とは思ってないけど……

「そうなんですか加奈さん。そうですね、湊と紅は別に邪魔にはならないけどボクはなりますよね。ええそうですね。そうに決まっています。親しきものにも礼儀在り。という諺が在るように例え身内で……」
シユン
ガッ

「いつまでネガティブ何だよ！お前のネガティブで九行使ってるんだよ！作者が手抜きだと思われちゃうだろうが！
それでもってなんでネガティブでオレのパンチ受け止めちゃってんの？

そこは普通に当たれよ！！それでもってタンコブ出来るかなんかしるよー！」

「いや、お前の方が長いぞ」

右に同じ

「バカやろ、説教と校長の話が長いのは常なんだよ」

更に右に同じ

「あのー…そろそろ喋っていい？」

「」「」「」「」

ハモったよ

「これから友達くるんだけど」

「お邪魔しまーす!!」

来ちゃった…

それよりも

「よくわかったね」

「ここら辺に東雲なんてここしかないからね」
なるほ…「キヤーー!!」急に発狂し出した

「ど、どこかのモデルさんですか!？」

「いや、モデルはやっていない」

「そうなんですか?でもどこかで見たことあるような…」

さつきからコイツ図々しいな……

「俺を見たことがあるならこの二人もあるはずだが」

「えっと、違ってたらゴメンナサイ。

あなたのお名前って秋葉さんですか?」

あれ?知り合い?ではないか。あつたら流石にこれだけの美形を忘れられないって

「ああ」

「えっ？じゃああの……」

「俺達は三霸帝と呼ばれていた」

サンハティ？

さんはてい？

三霸帝？

何それ？

ヤバイ…なんかいろいろヤバイ…（後書き）

「ただいま」

「おかえりなさい、加奈さん」

「お邪魔してるよ」

なんかいた…なんか梅雨時のキノコみたいになんかいた

ジャー

「……………」ジャバジャバパツパツ

「お邪魔してます…」

今度は堕天使出たー！！っかだれだ？
するとアニキが来て

「加奈さん、二人はボクの友達で、くしなだ 榊灘 みなと 湊と秋葉 あきは 紅です。
こう

因みに最初に挨拶したほうが湊で、トイレから出てきたのが紅です」

ヤバイ…なんかいろいろヤバイ…

あたしの少ない脳の容量が危ない（気がする）

「……………光、どこかに出掛けないか。
お前の妹は俺達が少し邪魔らしい」

別に邪魔とは思ってないけど…

「そうなんですか加奈さん。そうですね、湊や紅はともかく、ボク何がいていい訳ないですね。親しきものにも礼儀在り。という諺があるほどですしね。ああ、そんなことにも気付かないなんてやつぱりボクは…」

シユン

ガッ

「いつまでネガティブ何だよ！というお前のネガティブで九行も使えなよ！作者が手抜きしたと思われちゃうだろうが！つーかお前ネガティブなのになにオレのパンチ防いでんの？そこは普通に当たれよ！！そんでもってタンコブとか作れよ！！（以下略）」

「いや、お前の方が長いから」

右に同じ

「バカやろ、説教と校長の話が長いのは常なんだよ」

更に右に同じ

「あの…そろそろ喋っていい？」

「」「」「」

ハモったよ…

「友達くるんだけど」

「お邪魔しまーす!!」

来ちゃたよ

っーか

「よくわかったね」

「こちら辺に東雲なんてここしかないからね」
なるほ「キヤーー!!」

急に発狂し出した

「あ、あの皆さん、どこかのモデルさんですか!？」

「いや違うが」

「あれゝおかしいな。

見たことがある顔だし、何よりもまず忘れないと思うけど…」

コイツ少し図々しいな…この状況、あたしだけついてけてない。ア
ニキと湊さんは少し目をそらしてるし…

「あのーあなたのお名前聞いてもいいですか?多分思い出せると思
うので」

「秋葉」

短く一言

「えっ?じゃああの…」

「俺達は三霸帝と呼ばれていた」

サンハティ？

さんはてい？

三霸帝？

何それ？

アルバイト……………です 1

今日はアルバイト初日です。昨日、引き受けたのでしっかりしなくてはなりませんね！

昨日と言えば本屋さんからの帰りに湊と紅に会いました。因みに2人はボクと同じ大学です。そういえば紅に「なにかいい料理本が在ったら買つといてくれ。金は後で払うから、レシートは取つといてくれよ」

って言つてたから探さないと。

そういえば湊は、「実は今日はあれだよ、うん、アレなんだよ。だからバイト帰りに予約してたゲーム買つといて！」

少しパシられてる気がします……………。今日アレがあるんだな

そうこう考えてる内についちゃいました。

「失礼します」

「あ！東雲先輩！」

「こんにちは。」

「いやゝ、東雲くん！よく来てくれた！！」

「良音^{よしね}叔母さん。こんにちは」

「え、店長つて東雲先輩の叔母さんなんですか！？」

「はい、ボクの父方の親戚なんです。良音叔母さんは父の妹さんです」

「それは分かりました。でもなんで甥っ子を名字で呼ぶんですか？ さっき名字で呼んでましたよね？」

「ああそれ？この子の死んだお母さんが輝^{ひかる}だから」

あ、西田さん意味がわからないといった顔してますね。一応説明しておきましょう。

「叔母さんは死んだボクの母。つまり、義姉にあたるんです。それを名字で呼ぶわけにはいけないんです。それにボクは光と言つ名前はあまり好きではないんですよ」

「へえ」

「はい！！それじゃあ無駄話はここまでにして早く始めましょう。東雲くんはレジ宜しく」

「はいわかりました」

アルバイト……………です 2

アルバイト

皆さん一度はしたいな。やりたいな。という風に考えたことありませんか？そしていざアルバイト先を決めようとすると見つからない。求人誌で探そうにもよくわからない。そんなことはありませんか。

「先輩、もっとキツチリ働いて下さいよ。こんな忙しいときは特に」

「は、はいすみません」

今ボクはレジに立っているのですが……………

レジが……………

レジが……………

レジが……………

レジのテーブルが、商品で埋まってしまいました……………

「これって嫌がらせ？」

「違うわよ。流石に」

「ていうか店長手伝って下さいよ……」 「無理！万引き犯いるかも知れないし！」

「いまんって、多分」

そうですね。万引きなんてしてる人が居るわけないですよ……。でも……

《L・O・V・E ヒカル！！！！》 《L・O・V・E ヒカル！！！！》

「あ、あの皆さん困ります………」

恥ずかしいです……

みなしてボクを辱めるんですね……… こういう人達ならいるんですけど………

こういう時あの二人かあの人達がいれば「東雲の兄貴！」

噂をすれば影と言う諺が在るそうです。

その諺を作った人は天才だと思います。だって

「兄貴、金が必要ならあつしらに言ってくれば幾らでも………」

実現率が高いから

「黒井さん、その兄貴と言うのは止めて下さい……恥ずかしいです……… それに………」

お客さんが怖がってます……… だから「あれって黒井組の まっで

も……」「まさかここで暴れるんじゃない……」「そうだったらヒカル様が何とかしてくるわ!」怖がってませんでした

「黒井さん……すみませんが、今は忙しいのでお話なら後でお聞きますので、どうか今日は……」

「わかりやした、あつしも兄貴の邪魔は出来ませんので今日はこれで」

そういつて黒井さんは帰ってしまいました……

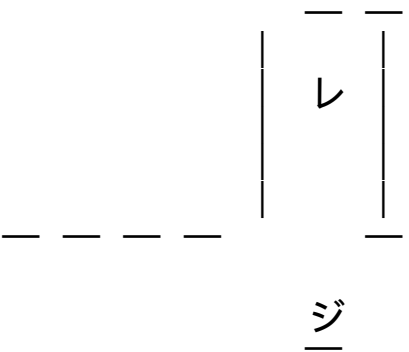
「先輩す」………」

西田さんの冷や汗凄い量です………

「西田さん、辛いなら休んで下さい。ここはボクがやっておきますから………」

「でもこの量は……」

レジが頭だとして



が今の現状……

「なんとかありますよ。だいじょうぶです」

「でも………」

「そうしなさい。今いると邪魔だから」

叔母さんの援護射撃（口撃？）で西田さんもようやく裏に戻りました。（正確には引つ張られたが正しいのですが）

……………ここからはボクが頑張らなくてはなりませんね

く西田 サイドく

「さて、あたしはら休みますかく」

店長だらけ過ぎ

「いいんです、先輩一人に任せちゃって」

あれはきついでしょ、流石に

「いいのよ、別に。それにあたしらは邪魔だから引いたのよ。あんたことね。それと……」

「三霸帝ってしってる?」

! ! ! ! ! ! ! !

「まさか先輩が!？」

「そのまさかよ……」

アルバイト……………です 3 (前書き)

感想とか絶賛大募集〜

アルバイト……………です 3

「正確には『四皇帝』何だけどね」

四皇帝……………

は実は知らない……………

ももとは四人だったから四皇帝らしい。でも最近その一人が色々あつて姿を見せないから三覇帝になつたらしい

「でも三覇帝とかって良く考えると中二病みたいな名前ですよね……」
いつて恥ずかしくないのかな

「でも強そうでしょ」それに……………」

「異常なまでに強い。ですよね」

「ええ」

そのくらいは知ってる

「それとレジ打ちと何の関係が!?!」

「見て来れば」凄じから」

く光 サイドく

「合計で3,980円になります。ありがとございました」

ふう、ようやくレジが空きました。少しは休めるかも……

いやいや、お客さんがいるのにそんなことを考えるなんて最低です（少しぐらい休んでもいい思うが）第一他の方より良い賃金で働かせて貰ってるのに休むなんて……あっお客さんだ。しかも三人

「「「いらつしゃいませ」「」

！？！？

お客さんが驚いてます……やっぱりボクだめ何ですね…（長いから後略♪）

～西田 サイド～

！？！？

「へ、何アレ……」

声がハモった。ただハモったんじゃない、そもそも周りに誰もいないのに何故ハモる！？他の定員（名前忘れた）は居ないのに！？どうなってんの！？

「東雲くんの通り名知ってる？」

「何が在るんですか？」

「例えば……『極潰し』『脱臼執行』『黄金の光』とか色々」

「うわゝまた中二病みたいなのが……」

「因みに今は『極彩色の御声』ね。まあ、これの場合は昔から、確か5、6才位から出来てたわね。ああやって一度に何回も話すのよ。」

「す」………

あなた人間ですか？

「因みに「あゝもうイイですもう！」あらそう？」

自分の中で『普通』が壊れそう。てか壊れたかも……

色々あつて

♪♪♪しばらくお待ちください♪♪♪

♪夕方♪

「あゝ終わった。という訳でバイトの諸君、帰った帰った！」

うーす、お疲れー、疲れたー、終わったー

などなど、みんな（名前忘れた）いって帰っていった。

「あー、終わった。」

東雲先輩。さよならー」

「はい、気をつけて帰って下さいね。」

「光 サイド」

今日はとても有意義な1日だと思います。アルバイトって意外と楽しいですね♪

次は明後日です…

因みにボクのシフトは

日、火、金です。

あ、どうでもいいですよね……スミマセン……気が利かなくて……

今思つと猛つてなくね？（前書き）

加奈と博美の会話でげす

今思うと猛ってなくね？

とりあえずなぐんか後藤ん家で起きたでーきーごーとっ
♪

あたし（じゃなくて私）東雲加奈はずっと、親が再婚が決まって、
アニキと対面する少し前から我慢してました

辛い……だけど、

我慢だ………だけど、

忍耐だ………だけど、

うお、く、

グッ！？

ぬお！？

んん、んんん！

ひでぶ！（何かの決壊音）

「無理だー……！！！！！！！！！！」

「うわ！！なにになに？なにがおきた！？」

「もう我慢出来ないー！！」

「なにが！」

「もう限界だ――！！！！！！」

「だから何が!？」

「この小説のタイトルを思い出してみなさい――!」

「…えと…『気弱な義兄と猛る義妹』?」

「そうよ、『猛る義妹』よ――!あたしぜんぜん猛ってないし――!あたし猛んないと「タイトル変えたら?」とか言われる――!」

「落ち着きなさい」「猛らせて――!あたしを猛らせて――!――!」

「黙れ……………」

「はい…………」

あの、ドス効いた声で黙れ…は止して。怖いから…

「確かに、確かにこの小説のタイトルは『気弱な義兄と猛る義妹』。前にバトル物みたいに光さんの二つ名がでた。そしてあんたにも二つ名がある。「闘争神」なんて二つ名が。でもね、これだけは忘れないで」

「な、なによ…………」

「この小説は、バトル物ではな――い――!――!――!」

湊と紅の果てしなくどうでもいい日常のいちよー前半

空は夕日で赤く染まっている。季節は秋、時刻は夕方の六時頃

「どうした！？おまえの力はそんなものか？出来なければ止めても構わんぞ」

「監督まだやれます！-！」

（上の暑苦しいシーンをみんな20回場面の情感、そのキャラクターになりきってやってみよう。りぴーとあふたーみー♪）
ぜえ、ぜえ、ぜえ、ぜえぜえ、ぜえぜえ、ぜえ疲れた……

「おい作者、ぜえが長い」

…すんません

「あゝ疲れたゝ暇ゝ眠みゝ世界中のみんな、オラに元気を分けてくれゝいやマジで」

……

……

………はっ

「分かったよ！！オレが悪かった。謝りますこの通り。」

なんか許してくれなさそうなので必死に土下座中なオレ。あ、因み

に場所はTSU。AYAの……

……

……

……

「知ってるか？かまぼこのピンク色の原料は南米にいとある……

……虫だ」「食いつらい事言わないで！」「許して欲しければ。そうだな。そうだな場所を変えよう。いつまでもこんな所にいたくないからな」

AVコーナー、である

ヤバイよ、どうすんのコレ怒っちゃったよ！ついでにオレの下半身も……「下ネタは言うなよ」

「YES、m」「ギ。スもダメな、」

こころ読まれてるよ……あ、Mじゃないよ。

そのまま歩いて十分経過

「着いた、な」

着いた所にオレは驚愕した

ついた場所は教会……

「ここかよ、ここなのかよ……何で「」から回想。わかめ食べたい。関係ないか、海藻だし。」

あれは高一の夏休み前の頃……

「あ、あのこういう場合どうしたら良いんだろ。とりあえずゴメン！」

オレはその時、告られていた。人生で、15年生きてきて、初めてしかも好きな女子から。オレは彼女が好きで、彼女もオレが好きで……でも振った。

「そつか……、ご、ゴメンね変なこと言って、ごめ、んね……」

次第に泣き出した彼女の頬には幾筋もの涙が這った後があった。告白される前は今は違う意味でその声は震えていた。それは泣いて震えているのか、悔しくて震えているのかオレには分からなかった。ただ……

以上回想強制終了」

「あんな辛いことが在った場所で……」

俺の声が震えていた。

何もこんな場所でも……

「お前を怒らせたのは悪かった。ここでオレに何をさせようしてるのかはわからねえが、お前が怒っているって言うなら何度でも謝る。だから、

だからこの場所だけは止めてくれ!!」

オレの声と体は恐怖で震えていた。

すると紅が目を瞑りだした。紅は何かを思い付くと目を瞑る癖がある。

「なあ、もういいか？話しても？」

はあ、

溜め息。紅はまるで疲れた。と行った感じだった

「たく、なに在りもしない回想を語っているんだ？そんなに逃げたいのか？文調変えてまで、無いはずの作り話を使って。というかよくコンマ数秒でそこまで考えついたな！？そしてちゃっかり自分の願望入ってたよな！？協会で告白って、まあ有りかもしれんが」「ドラえもんーぐえ！」

「逃げるな。罰と言っても簡単な事だろ？」

「オレこの協会苦手なんだよ。知ってんだろ…」

「そもそもお前が俺の携帯を水に落としたのが悪いんだろ？」

「いやまあそうなんだけど。」

さっきTS。TAYAにいたときの回想←

トイレで……、

「紅、今何時？」

「自分の携帯とか腕時計は無いのか？」

「携帯は家へ、時計は忘れた」

「そうか、スマンが今手を洗っているから無理だ。裏ポケットに携帯が入っているから自分で取ってくれ」

「はいよ」

スポツと取ってパカツと開けたが……

「相変わらず古いな……」

「殆ど使わない物には金をかけない。みんなそうだろ？」

「大半は携帯に金を使う。だけどな」

「ほい、さへんきゅ」

ポイと投げたらバチャ…………

水道水をモロに浴びたと言う訳である。まあ、投げなければ良かったんだけどね……。以上回想終了

「まあいい。入るぞ」

後半へ続く（キートン山田風に。あれだよ、チビ。ここでナレーターやってるあの人）

湊と紅の果てしなくどうでもいい日常のいちよー後半（前書き）

感想くれマジで（どうかの誰か）

ホント下さい。批評でもいいんで

湊と紅の果てしなくどうでもいい日常のいちよー後半

紅達が協会に来るちよつと前（具体的にAVコーナーにいたとき）

1人のシスターが……

「あゝん（はあとッ）なんてステキなんでしょう！あの強さ、あの手から繰り出されるパンチがいったい、どれほどの力何でしょう？そしてあのお姿、凛々しく優しい……お顔。そしてなによりもあの……丁寧に磨かれたかのような宝石のような強い意志！ステキで御座います！人形でもこれほどの素晴らしさ！正に神！ああ、なんてステキな御方………

湊様……ん（気持ち悪い位ハートがいっぱい。因みにハートがいっぱいと言ってもあまり想像できない作者、その名はバグ）

「さゝて入るか」と紅は言うが…「オレは入んねえぞオイ。つか
デメーは入れねえだろ」

「お前が入らなければ意味が無いだろう」

「話が微妙に繋がってないぞオイ」

因みにここの協会、（名前は忘れた）何故か紅は出入り禁止をくら
っている。何故か

「ああ、出入り禁止の事か？安心しろ。光が頭を下げてくれたお陰
でお前を連れて行くことを大前提に本当に用がある時のみ、入るこ
とを許された。因みに光には礼はした」

「へえ」×8

「ト。ビアか。随分古いのが出てきたな。まあいい行く」「粉碎！
！！！！」「なっ！？」

紅に殴りかかった。当たらんけど。ふつうは殴りかかんねえけどな。
理由は

だつてここ嫌いなんだもん…だから

ダッシュで逃げるぜ！！

「く、待て！！ホントに待て！！」

「知ってるか紅、待てと言われてホントに待つ奴は一年前にいたんだよ！その協会に！」

[illegible]
$$\wedge ?$$

まえ見てみるね、アハ
プツプー！！

うはくクラクション鳴らしてるぜ

すると紅が「仕方ない……お前のパンチで切り抜ける……!!!」

りようかゝい。それじゃあいくぜ！！てか趣旨変わってない？ま
いっか

[illegible]

止まっ
たな。
うん

てか話、急になつてんな。普通は走馬灯とかが見えて挽かれるんだろ。うな。普通は……ね

「二年ぶりか？何かを本気の五歩手前で殴ったのは……」

かつて、四皇帝と呼ばれた四人の少年がいた

彼らはどうしても許せない物を力で黙らせ続けた

別に言葉で止めることも出来ただろう

でも出来なかったから力を使った

誰も耳を傾けなかったから

数では負けていた

しかし何故か

毎度の如くほぼ無傷でたち続けていた

ひとり

蹴りで

ひとり

素手で

ひとり

投擲で

ひとり

外すことで

まさに蟻を踏み潰すが如く

ここに居るのは素手で、某A国の一個大隊を1人で殲滅した少年。
いや青年

名は
櫛灘 湊
通称 軍破の湊

四皇帝で一番余裕と豪快さを持つ男

「さあて中に入るか」「急にどうした？さっきまで嫌がってたのに」

「気が変わった。それだけ。それに」

「昔の拠点に入るのもいいかなあ、って思ってたな」

昔、良く立て籠もったところ

「ふ、まあいいさ
それじゃ行くぞ。湊」

「へっい」

「それにしても」

「何だよ？」

「バグの書く奴は皆、テンポがはやいな。もう少し丁寧に書けないのか全く……」

自分のキャラにここまで言われるとは思わなかったよ……………（；、
A）

「泣くなよ作者」

ありがとう湊

「それよりも」

「それにしてもの次はそれよりもかよ」

「お前が殴った車、どうなるんだ？」

「は！！！！？」

光（「人類の底辺」と加奈さんと台所事情……………です

《晩飯はやっぱりエビフライ！》

死んだ母の口癖でした。母はエビフライが大好きで、よく作ってました。

僕も味覚が母に似たのか僕もエビフライが大好きなんです。

今日はたまたまそれを思い出して食べたくなって買い物にきています。

「アニキ、今日の晩御飯何？」

「今日の晩御飯はエビフライです。他にも何か食べたい物が在ったら言っして下さい」

「いや、エビだけで充分だから…」

そもそもフライってそんなに好きじゃないんだ「そ、そうなんですか？やっぱり僕のもじゃばりでしたね…」

自分の好みを押し付けていたんですね…やっぱり「はいストップ！」加奈さんが落ち着いて僕の言葉を遮りました。

僕、またやつちやてしまいましたか？

「アニキ、アタシは別にフライがそんなに好きじゃないだけ。だか

ら食べられないわけじゃないから。」

今日の加奈さん……

「それじゃあエビ取ってくるから。アニキは他の宜しく！」

そういつて加奈さんはエビを取りに行っていました。

なんかいつもとちがう……いつもなら慌てながら（必死にとも言う）弁解をします。というより僕の性格のせいなんですが……。それに

「エビ、反対ですよ……」

何故か海鮮コーナーとは真逆の方に行ってしまった……。

「ひとまず足りない食材をいっぺんに買ってしまったでしょう」「そういえばお米が無かったはずだからまずはお米を、次は…お醤油も足りなかったはずだからそれもですね。それにしても……」

「加奈さん、ちゃんとエビ取ってきて来るんでしょうか？」

そこが心配です。

加奈さんが一番納得出来る言葉は『大は小を兼ねる』。ようするに大きい物は小さい物の替わりになる。と言う意味です。それは加奈さん自身が言っていました。

いえ、加奈さんは流石に多いのを選ばないでしょう。でも……前もやっちゃってましたし……
それにいつもと雰囲気……いえ、雰囲気は別に関係ありませんけど……

は！まさか僕、家族を疑ってませんか！？

いえ、ませんかじゃありません。疑ってました。ああ……僕は本当に駄目な人間です家族を疑ってしまうなんて加奈さんに、それと母さんと父さんにも失礼です

ああ、もう僕は最低ですグズですカスです死んだほう『死ぬなんて……言う……よ！……！！！！！！！！！！』

…

……

……

……

……

……

嫌なこと思い出しました……。彼女が嫌いなわけではありませんが……どちらかと言うと好きな部類なのですけど……

あ、母のことじゃありませんよ。そもそも母を『彼女』なんて流石に言いませんし……。

あ、す、すみません……どうでもいいですよ……

く加奈 サイドく

「海鮮コーナーはいずこに？」

迷った。ほんとおおおおにおおに、迷った……

「なんで迷った……？」

別にこのスーパーが特別に広いわけじゃないから。外装から内装、品から料金、そして建物の大きさまで全て普通

だと思う……少なくとも……

「つかスーパーで迷子は恥ずかしいな」

ええええい。

何故迷う何故迷った……

「ていうか海鮮コーナーって反対？」

そうだしたらマズい……

今日は、いや今日からは出来る義妹になるんだ！そしてそう遠くない未来に『気弱な義兄と出来る義妹』に計画に支障が……

そもそも出来んのか？

という話はひとまず地面に置いて、サッカーの要領で思いっきり蹴り飛ばしてほおっておこう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8920h/>

気弱な義兄と猛る義妹

2010年10月9日15時07分発行